

文教授会の反共性はどこにあるか？

62年を起点として、あらゆる意味において戦後の市民社会と戦後民主主義を軸とする運動は右からも左からも盛り上がり過ぎていた。民青系諸君の存人というところの「民主的伝統」をもつ教育大においてもそれは漸次移転の推進過程において進行していった。即ち右からはかのMPに策料されるような産物政策の積極的啓蒙と研究教育推進委員の近代的管理主義的再編をほからんとする部外が登場し、左からは教育大の民主性—その内側は谷崎・藤沢林岡としての教授会を軸とする「大学自治」をイデオロギー的に美化する「大学自治論」「学内の自由論」—なるものが興は体制の根幹を壊すしかないと鋭く突き出し、果敢的にも突き破っていったところの我が生学斗の斗いも登場してきたのである。そうして中で反対派・民青は、せいぜい「民主主義のルールを叩く」というような対応しかなしではなかったのである。

かかる戦術的反対派としての反対派教授、日共が推進派に敵対せざるを得ないということも論理的必然であり、現更にも破産を宣告されているのである。こうした戦後民主主義派は、階級斗争の新たな展開に「戦後民主主義」の碑を築く。そのことによつて、ブルジョワジーの勝利への道をはき通るものではない。まさに階級情勢に占める存立基礎の同一性からして、反対派教授、日共がこぎ出す条件は存在しており、また我が生学斗は彼らの存立基礎を左から盛り崩すものである。故に、彼らは決定的局面においては我々に敵対し、反革命としての役割を果たさざるを得ないのである。

文教授会の授業再開策劫はどのようなものか

文教授会は今かにかつまで授業再開に志じた。だがその論拠はのロックアウト下にある学生と教員が示されていない。というふうなものにすぎなかったのである。即ち彼らは「罷校」をおこない、8月教壇空襲→9月授業再開を続している。一体「罷校」から即ち

べき何物かがこの教育大にあるとでもいうのだろうか。あるとすれば彼らの即自的階級利害だけであろう。だが「文学部大塚残留」が噂さしかたないことは明々白々である。

日共民青の「レッド・バナー」策劫を許すな！

東大教育大外大を皮切りに脚点を奪われた日共は、つまた立派・健立・東経大においても跋扈している。彼らは今決意を固め、「九月攻撃」をたくらんでいる。それは教育大においてもあらわれるであろう。我が生学斗は教育大における唯一の斗争部隊として、生学斗闘い出し「レッド・バナー」攻撃を粉碎せねばならない。戦後民主主義派としての彼らとの対決は、単なる見直しではなく、階級斗争の一転機モメントであり、前途の条件をあることを銘記せねばならない。

本日文教授会の授業再開策劫を粉碎せよ！

かかる観点に立つならば、本日の斗いは授業再開阻止を直接の課題としつつも、反対派教授を単一・反革命へと悪裂を生ぜしめ、階級斗争の前途を十年前へ引きもどすような反動的対策を粉碎していく斗いのオーソリティといかぬではない。我々にとって向題なのは「罷校か否か」というようなことではなく、戦術的反対派としての我々が、その戦術的対決の場をどこまで深化できるのか、ということであり、このことを彼らには、ヨリとつづけていかねばならない。

昨日ロジャー・ス訪日抗議、日米経済合同委紛争斗争を安保紛争生学斗を先頭に斗いぬく

昨日我が教育大生学評は安保紛争生学斗共闘組織の一翼として、ロジャー・ス訪日抗議日米経済合同委紛争斗争を終極的闘いに斗いぬいた。だが教育大においては生学斗の大衆的隊列の形成がめざされながらも、結果としては我が生学評と若干のK.S.B.M.Lの諸君しか結果しなかった。我々はこの点の否定的態容から政治斗争の細目の組織化を要とし

進めねばならぬ